

「私たちの心」

～神様の心を知っていますか？最大の敵は無関心～

マルコ 15 : 26 ~ 38

■ 人はなぜ争うのか。

世界を見てもテロや戦争がたくさん起きていることがわかります。人はなぜ、このような悲惨なことをするのでしょうか。ある一部の人たちは宗教を元にして争いをしています。またイエスキリストを神としている人がなぜこのようなことをするのでしょうか。そして歴史を見ても同じことを繰り返していることも分かります。私たちの周りにはキリスト教に対して戦争を起こしてきたというマイナスなイメージを持っていることを目の当たりにするかもしれません。なぜこのようなことが起きているのでしょうか。今日の聖書箇所にはイエスキリストが十字架にかかる時、その罪状に「ユダヤ人の王」と書かれていたのです。当時の人が求めていた救い主というのは王としての治めることのできる人間的に目に見える姿でした。ですから、当時のユダヤ人たちはローマの支配から救ってくれるような王を求めていたのです。それが戦争の要因となっていました。そして王になりたい人が多くいるために争いが起こってくるのです。これは現代の私たちにも引き継がれているものです。私たちの心に神様以外が治めるようになる心です。そこに自分が中心になってしまうこととなります。それが自己中心として私たちの中に現れてきているのです。それが私たちの心にある限り、私たちの周りに争いがなくなることはないのです。私たちは自分に足りないものがある時、周りから欲しがったりするのです。そればかりか奪うようになり、周りを傷つけても得るようになっていってしまうのです。それが争ってしまう理由です。キリスト教が争いの理由ではありません。私たちの自己中心の思いにキリスト教を使っているだけなのです。自分が正しいことを周りの人たちに押し付けていき、それに従わない人たちは排除してしまうのです。これは遠い国の話しや、過去を振り返っての話しではありません。現在生きている私たちの生き方にも重なっている部分はないでしょうか。人が何のルールもなく、自分の思い通りに生活していたとしたら、私たちの周りには事件がたくさん起きているでしょう。それは罪あるものとして生まれているすなわち原罪の中で生きているからです。私たちの心は感情的頑固な意志によって生きているのです。私たちは「頑固」という言葉と「頑な」という言葉では相手に与える印象が違います。そのように私たちは自分の心が神様にあつての頑固さになっているのであれば周りに良い影響を与えていくのですが、自分の感情に右往左往させられている中では「頑な」な状況では周りを破壊していくこととなります。この悪い思いが戦争に繋がっているのです。私たちの周りにある不要と思われるものを排除する傾向があります。しかし神様と向きあうならば、私たちはそれではいけないと気づくのです。私たちは戦いの渦中においても神にあって正しい判断をし自らの命を省みない人がいたことを知らなければいけません。その人は戦争をしている為政者たちを見ているのではありません。それよりは自分の心の中にそれと同じような心を持っていることに気づかなければいけません。

■ ステパノの歩み

使徒時代の中にステパノという人物がいます。彼は 12 弟子ではありませんでしたが、イエスキリストの生き方にならう人になっていきました。ステパノは殉教者となります。その最後の最後までイエスの姿を現す人でした。十字架の上のイエスの言葉と同じように自分に石を投げる者の罪を赦してほしいと祈ったのです。その祈りを聞き、我に返るのではなく、かえって怒りに心を燃やしていくのでした。そのような頑ななユダヤ人には厳しい歴史の中で悲しい事件に巻き込まれていくことが分かります。ですから私たちはユダヤ人のために祈らなければいけません。彼らの目が開かれるようにならなければいけません。そして自らのためにも祈りましょう。

■ 神の性質と私たち

神の性質に Holy (聖さ) と Love (愛) があります。神は聖さと愛のバランスの中で表されるのです。どちらに偏ることもありません。すべてを包み込む愛もありながらも、罪のない聖さも合わせもつのです。ですから、人の目から見れば神は愛なのだからすべてを赦せば良いのに…と思うこともあるかと思えます。しかし私たちが罪を持っていては神に近づくことができません。そのために罪の贖いのためにイエスキリストが完全なる犠牲として十字架にかかってくださったのです。私たちには

神の計画が一人ひとりにあり、完全な状態で生まれてきています。しかし私たちは大きくなるなかで歪んでしまったり、傷つけられたりしながら完全な状態ではなく、神の計画にそって歩むことができなくなっているのです。そのような中で自分は不要であると思ってしまうのです。ここに私たちの大きな罪が潜んでいるのです。自己卑下し、自分には価値がないという思いが、さも正しい判断であるかのように思いつつ歩んでいるのです。それが私たちにとって一番悲しいことではないでしょうか。

■ 私はダメをやめましょう！

しかし、私たちは過去に受けた傷や罪によって未来に恐れを私たちは自分をダメな存在であると思ってしまうことを止めましょう。私たちはすべてがダメではなく、罪をしてしまう性質があることだけがダメなのです。そういう自分は十字架によって赦されたと思いついていかなくては行けません。私たちが自分はダメであると思いついて歩むようにはしてはいけません。そして自分をダメであるという自分を責める思いは、私たちの周りにいる人を責める思いにつながっていきます。これが怖いことなのです。イエスキリストの愛に気づいた人は自分を責める思いがなくなっていくと思います。自分にある罪の性質を排除しようとするようになります。

■ 私たちの歩みは…

私たちはどのように歩んでいくことが求められているのでしょうか。神さまの愛はイエスキリストをこの地上におくり、十字架につけ、私たちの贖いとなってくださいました。ここに神の愛は完成しているのです。ですからこの愛に基づいて歩んでいくだけなのです。では私たちの人生の中にゴールはあるのでしょうか。それは私たちの生涯をこの愛を土台として歩み続けるしかないのです。その決断を日々の生活の中で行っていくしかないのです。本来ならば、私たちが負うべき十字架をイエスキリストが身代わりとなってくださいました。ここに愛があります。罪が受け継がれていくと 3 代、4 代後に刈り取りしなければなりません。私たちの心が感情的な頑固な意志によって決断し続けるのではなく、神の愛によって素直に認めて歩むことが大切です。

過去の歴史の中で、戦争を見てみると人を人と思えないで、いとも簡単にいのちを奪っていることに気がつきます。その中でもホロコーストというのは人の歴史の中で大きな悲しみを生み出した事件であるといえます。また、そのことを振り返ってみても、悲しみが湧いてきます。その体験者であるイエフダバコンさんという人物は自分の通ってきたことがらに対して、「自分が苦しんだことによって周りの人が苦しんでいることが理解できるようになり、受け入れることを学びました。私たち人間は互いに愛し合わなければなりません。」との話しを残しているのです。私たちも今の現状の中でこんな辛いところを通っていると人のせいにして、自暴自棄になることもできません。反対にそれを相手を理解するために経験をしていると思うことは全く違います。だからこそ、私たちは「何を選び、何をしますか？」これが大切です。過去の傷、経験の中で、間違った歩みを続けますか。それとも神様と一緒に新しい歩みをしていきますか。それは完璧な歩みをするのではなく、自分と向き合いながら、イエス様のように歩むために逃げずに戦っていくことです。私たちは傷つけられたのだから、周りの人を傷つけて歩むことは良いことでしょうか。それでは互いに愛し合う生き方になることはできません。私たちの心が周りの人に対して愛の反対である無関心にならないように整えていかなければなりません。そのために私たちの心が自己義になっていないか、自己中心になっていないか、心の王座にイエス様がいるのか。私たちはそのことに注意しながら、互いに愛し合えるようになっていきましょう。